

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第162号（2019年11月）

今回から故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間31回に亘り掲載された「風に戯れて」と題したエッセイを載せていきます。

(一) 一行の文に思いを託して 白井啓治

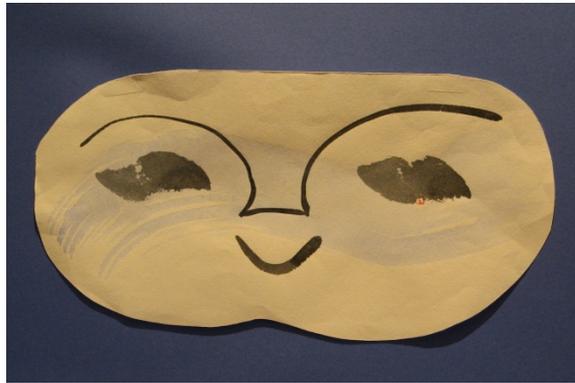
『風にのって時に漂い言葉にあそぶ』

石岡市に越してきて十年になる。その十年の暮らしの中で風に戯れ、呟いて文字に落とした一行の文である。文としての出来はともかくとして気に入っている一行文の一つである。本当ならば一行詩と言いたいところなのであるが、「詩」と言ってしまうと気楽に言葉に呟いて遊ぶことが出来なくなってしまう。それで一行文と呼んでいる。

日の移ろいの中に在る様々な感情、心模様を余分な説明を省き、風景として一つの言葉に落とし眺め、その時々を納得する。そうした積み上げが脚本を書くのに、また自分の形容詞を持つのに役立つであろう、ともう四十年も続けている。しかし、詩を紡ぐという意識を持たないので言葉の遊びであってみれば、種田山頭火のような一行の詩文が生まれる事はごく稀、というよりは殆どない。

今回から、今年度一杯ぐらいまでであろうか、月に三回、日々の雑感を兼平ちえこさんの絵に後

押しされながら書くこととなった。兼平さんとは、朗読舞の聾女優小林幸枝さんが座長をつとめる劇団「ことば座」で、私の書く脚本の舞台背景画として「常世の国の五百相」に挑戦して頂いている間柄である。



このコーナーへの原稿の話しを頂いたとき、写真もと言われたのであったが、渋る私にことば座の舞台を観ていた編集氏から兼平さんの絵では、との提案があり、それならば、と話を受けることとなった次第である。

連続ドラマの第一回目のようなもので、取り敢えず登場人物の紹介もどきをさせて頂いた。

さて、次回からは常世の国の風に吹かれながら、どんな一言の呟きの風景が生まれるかは分からないが、『雑草だって目守（まも）れば花のきれいな』と意識して、風に戯れながら暮らしの中のさやかな発見を言葉に呟いてみたいと思う。出来れば

声にして読んでいただければ嬉しいな、と脚本家の勝手を思っている（2008年7月3日）

ふる里の風に聞いてみた ふる里は何処かと

白井啓治

この地に越してきて何時も不思議に思い、つい風に向かつて声してしまう事がある。「ねえ…、この地のふる里って何処にあるんですか？」

東京と言う地は、毒でも薬でも何でも一旦は飲み込んでしまう所であったが、この地は自分たちが口にしてきたものしか口にしない不思議な地である。もつと美味しい物があると声しても頑なに口を閉じてしまう。この地を閉鎖的と言う人も居るが、小生は唯の無知と意識的に表現している。

何でも受け入れてしまう東京と言う雑多すぎる大都会に比べると、多くの地方は閉鎖的である。そして閉鎖的ではあるが、その中で自分たちの文化を築いている。ところがこの地はそうでないのだ。だから小生、「ねえ…、此処のふる里って何処にあるの？」と何時も大声に聞いてみる。

だが応えの見えたことはない。今日はお犬様にシャンプーをしてやる。さっぱり気持ちいが快適なのか、お猫様に見習ってか、幾つかのお気に入りの寝ったり場所を順に巡り、良い香りを刷り込んでいた。お猫様は、お犬様の燥ぐのを冷やかな目で見降ろし、そこに一日中寝たりしている。

今もそうである。時々小生が振り向いて見ると、わざとらしくファーム・・・・と大欠伸をする。小生が「耳ちゃん」とよぶと尻尾を大きく一振りする。実に平和なる光景である。

本日も我が家は平安。（2015年6月10日記）

あまり聞きなれない言葉だが、世の中に非常に例が多い。社会がスムーズに展開するためには、これが大きな弊害となる。

要するに、老人の小さな抵抗の他、あまり幅を利かさないうでほしい者が、大見えを切つて、社会にのさばり過ぎる事例まで、数え上げればきりが無い。即ち日産のゴーン前社長、とかスポーツ関係数々の前監督・コーチ等。

*

さて、特に年配者などが、自分のささやかな経験を過大評価し、切羽詰まった状況に対してさへ、本腰を入れず、強く反対する傾向がある。例えば、河川氾濫の恐れから早めに避難勧告を受けても、これまで70年の経験からこれくらいの雨では避難する必要はない…として、頑固に拒否する。上流に長期間豪雨が続いたとか、砂防ダムが決壊しそうだとか、言われても全く聞く耳を持たない。或いは、古里活性化のため、何かをやるうとして、も、今までこうしてやってきたんだから、このままでよかつたよ！と決して賛同しない。俺の利益がいかほどかだけが問題で、しかも若造などの提案で、何か改革など、シヤラクサイ話と決めつける。正にわずかの経験が大きいのし上がり、逆機能を大きく発揮する弊害である。

なにも、アメリカが進んでいると思つてはいないが、近年米国フロリダで起きた事例だが、なるほどと感心した例がある。フロリダは米国本土最南端で北緯30度くらい(日本の鹿児島沖縄県に相当)である、当然、冬は暖かいので、定年退職者など多数、高齢者の終の棲家となつている。私

も2泊した事があるが、誠に結構で、パラダイスと言える。しかしフロリダ州の泣き所は、毎年のように強烈なハリケーンが通過する。ある年の秋、強烈なハリケーンが来ると予測され、一斉に避難勧告が出された。州政府は転ばぬ先の杖として、早々に360万人に避難勧告を出した。そしたら、指定の避難場所に集まった避難者数は、何と600万人であつたという。アメリカは西部開拓時代から、己の命は自分で守る…が鉄則。

コンビニの数より銃販売店数の方が多いとか。日本の銃規制成功がうらやましか。この辺が、催促されても動かぬ日本人とアメリカ人の大きな違い。自由主義とは他人に迷惑をかけることが第一。動かずに迷惑をかけるのは自由主義ではなく、勝手主義というもの。

話は長くなるが、昭和56(1981)年、竜ヶ崎市が小貝川堤防決壊で大被害にあつた。その時私は県庁にいたが、現地の畜産被害調査を命じられた。早速現地の役場や農協の職員に案内され現場に着いたが、最深は水深9mはある。電柱は人間の背丈ぐらいいしか残っていない。さあ、いかにして浸水した畜産農家を巡回するか。早速県庁から県警本部及び消防庁に対し、調査協力を依頼。あの強烈な暑さの中、警察と消防の方々が、私と役場職員を乗せ、懸命にボートを漕いでくれた。そしたらある民家の傍を通つた時、その家の主が手を振つて『お巡りさんよ！なんか食べ物ないかね』と必死で叫ぶ。消防の方は、さつき避難してくれ…とあれ程云つたのに、この家は2階造りだから大丈夫。俺は絶対に逃げない！と豪語したばかりだつた。

更に珍事は続く。なんと調査に行つたら、豚飼

養農家は13戸だが、水に浸ると大方はドザエモン。しかし、浮かび上がって平チャラで泳ぎだす豚もおり、トライアスロンではないが、なんと10キロメートルも泳ぎ切つた英雄もいた。30kg位の雄。隣の農家様が助けてくれていた。10km泳いだ証拠は、我々は豚コレラ予防注射をすれば、アルミの耳標に、いづどこで誰が誰の豚に予防注射をしたかがすぐわかる「マイナンバー」を刻印してある。後日、ブー様は無事実家へ、ご帰還あそばした。

次は逸話中の逸話。「豚もおだてりや木に登る」なんて諺は多分ないのであるが、田んぼの真ん中の大きな柳の木の下(地上約7m)に、なんとこれも30kgほどの中豚が、しつかり木にしがみついて、大声でギーギー(豚は苦しい時はギーギーと啼く。腹がすけばブーブーと鳴く)と啼いている。これも私の要請で、消防と警察の方が梯子をかけて上り、体にしつかりロープを巻き付けて(逮捕術は慣れたもの)、数人でロープを操り、木から無事着舟。皆さんは汗の濁流であつた。これも耳標から戸籍を割り出し、無事ご帰還(携帯のない時代)。今更ながら、警察・消防その他の方々に心から感謝申し上げます。ほぼ40年後の感謝の言葉です。

*

なぜイスラム教徒は豚肉を食べないか？

チコちゃんの難問じゃないが大きな訳がある。イスラム教徒は元々、遊牧民。群れのリーダーは家畜を無事目的地に誘導するのが大きな本来の仕事。ところが豚という動物はAが西向きやBは東を向く。決して統一行動をとらない。普通動物の群れは、リーダーの動きに従うものだが、豚は全

く関係なし。俺は俺の道を行く。ブタもヒトも、モグラなど食虫目からの分家だが、遺伝子を分けしてもらったとき、独善主義という遺伝子を豚は大量に受け継ぎ、トランプ氏は豚に倣って普通の人より多く「独善遺伝子」を大量に受け取ったに違いない。私は嗤われるかも知れないが、かなりへそ曲がり、皓齒明眸（こうしめいぼう）の超美人であるが、名だたる政財界の大物だろうが、すぐその遺伝子を気にする。ひよっこり現れた偶然なのか、来るべくしてきた遺伝子の塊なのか。と。ま、そんな事はどうでもよいのだが、豚はただものではない。嗅覚はイヌ以上なのだ。

そんなわけで豚は、牛やラクダの様に集団移動ができない。そこでイスラム教信者は決して豚肉を食ってはならないとコーランに書き足し、そうすればリーダーのメンツも立つ。豚肉は優れた食品だが、イスラム信者にとつて、豚は厄介で、下品なものとなり、排除される結果となった。私はインドネシアのイスラム教信者の獣医師を、国から頼まれ、病勢鑑定研修を1年間預かった経験があるが、その時1夜我が家に招待し、巻織汁（けんちんじゆ）をこちそうしたが、豚肉ではなく牛肉は決して最高の出来ではなかった。それでも彼は喜んで食べてくれた。国へ帰ってからも手紙でもておいしかったと礼状が届いた。

なお、竜ヶ崎で、牛については3戸ほどあったが、コミュニケーションよく、いずれも人よりも早く、高台に避難して全頭無事であった。この辺が酪農組合と、しつかりコミュニケーションができ、異常乳対策とか、伝染病対策など日頃訓練が行き届いている証拠と感服した次第。酪農だけは決して俺流ではなりたない。同業は決めら

れた基準を守らない事には纏まりがつかない。

炭疽病は人畜共通感染症である。軽く人を殺す。生物兵器の筆頭である。よく牛に発生する「炭疽病」の芽胞は、チトヤソットの消毒などでは死なない。100℃でも死なないし、100年も土中で生きている。我々獣医仲間の隠語として、炭疽病の事を「洪水病」ともいう。理由は、坂東太郎の上流である群馬県あたりで、牛が死ぬと、個人の土地に埋めるのは誰も嫌う。やむなく、利根川の河川敷きに穴を掘って埋める。すると、何十年に1回という大洪水で、掘り起こされ、下流の千葉県・茨城県で、炭疽病が流行する。私も実体験で、竜ヶ崎市で炭疽病が発生した時には、すでに合乳したタンクローリーを、携帯電話のなかった時代オートバイで追跡、ローリーが加工場に入る直前にストップをかけ、被害の拡大を防いだ事があった。合乳が次々重なると、最初1頭分なら3000円くらいの損失で済むものが、たちまち数百万円に膨れ上がる。獣医師の職業は、1刻を争う、かなりスリリングな一面もある。

その点豚は、皆オレ流が強く、かなり賭博性が強い。その点堅い基準は、窮屈ではあるが、堅実経営を求めるとは、組織一丸となった合理性が強く求められる。

*

さて、老人の沽券にかかわる話は、強固な岩盤で、チトヤソットの説得などでは簡単に退けられる。これまで曲がりなりにも、やや安定してきたシステムを、新しい人達にひっくり返されてたまるか。△△委員とか、○○委員長とかいう地位を失いたくないからであろう。老害の上もなし。化石より、なお、古い人種をなんと呼ぶのかな？

昔、英国の王立人類学学会で、若い考古学者が、アフリカの各地で古代人類の化石を発掘し学会報告をした。すると、たちまち老学者達の攻撃の矢玉を浴びた。理由は、人類という高級な生物があの野蛮なアフリカで進化するわけではない。もし猿から進化したにしても、高等な人類はこのイギリスあたりで進化したに違いない。と猛攻撃を受け、葬り去らたという。それが後にミッシングリンク（AとCをつなぐB）に相当する最重要な化石であったりする場合もあった。折角の新発見も、大声で、罵られ、まるで台無し。古タヌキの王立学会は正に有害な存在であった。ダーウインの「進化論」でさえ、しばらく発表を差し控えていたという。そもそも進化論は認められず、生物種は、ノアの方舟のメンバーだけが神の造った品種だと思っているキリスト教原理主義者が今でもいるという。今でもアメリカの高校で進化論を授業した教師は、キリスト教原理主義者らにより殺害されている。

農地法は、それなりに幾度となく改正はされている。食糧難時代には、それなりの効果があったであろうが、今は何もかにも輸入に頼り、現在日本の食糧自給率38%という、べら棒な低率。先進国では最低。とにかく政府は4人分の食糧で10人が生きていけ！ダメなら後の6人は黙って死んでくれ！と、はつきり言っているようなもの。

要するに私の言いたいのは、時世が変わり、莫大な耕作放棄地が増加ゆえ、人口減少地の農地は、もつと規制を緩め、土地の取得を簡略にせよ。U&Iターンで若者を農村に呼び戻し、農村の活性化を図れ!! と強く言いたい。色々な事情が許せば、誰でも自分の生まれ故郷で働きたいのは、当

然であろう。

*

今後、第二第三のトランプ氏出現も有り得る。自国第一主義。徹底した保護貿易で兵糧攻め。敵の軍師に勝る首相補佐官でガッチリ固める臨戦状態でいかなければ!! 自給率の低い日本は忽ち狙い所。いっどんな乱暴者が、艦砲射撃で攻めて来るか分かりやしない。

農地がないので輸入に頼るなら、それは分かる。耕作しても食っていけないから、やむを得ず何も作らないのだ。それでいて、後継人もいないのに、荒れた農地を莫大な国補を使って耕地整理を続行。整理したって後継者がいないので耕作はしないのだ。農地とは自然保護のため必要不可欠のものだ。そして国の借金は増える一方。どうしてこんな不合理が罷り通るのか? こんな法律を継続させている議員を選んだのは誰なのか? 要するに国民の民主主義レベルが超低いという事だ。安倍さんもあれだけ力を得たのなら、「日本列島改変論」でもぶち上げ、化石法律は片っ端から整理し、憲法も実情に合わせ、若者が真から喜べる列島を造り直すべきだ。巨大な二大政党間で政権争いするならわかるけど、弱小政党が纏まることでもできず、我田引水に終始する高額歳費狙いの小者集団相手に、時間を浪費している時ではない。安倍総理は、こんな小さな日本だけじゃなく、世界の安定のために大乗的に働け。

*

さて話を戻し、私に言わせれば、一人の人間の経験年数は、せいぜい70年。親や祖父母から聞いた経験を重ねても100年。合わせて170年くらいだ。そんな短期間の経験では災害の歴史など

殆ど信用に足るデータとは言えない。『この土地に70年住んでいるけど...』と大きな唖呵を切るが、たった70年がなんだというの? もっとスケールは大きく構えるべきである。火山列島(*1)の日本においては、巨大地震・火山噴火・巨大津波など、千年・万年単位で歴史を参考にすべきことである。古い事は、歴史書や古文書を加えても、1千年がいいところ。要するに、千2百年ぐらいいより古いことや、化石や地層発掘しか、正しい情報を入手できない。それを根拠に何か大きな案件を企てるのであるなら、例えば原発建設など、もし事故が起きたら大事件になる大規模開発などはかなり慎重であるべきだ。それゆえ、海に囲まれた日本列島は、活断層など、慎重に見極める必要がある。いわば火山の隙間に巨大都市を建設しているようなもの。火山の麓に住宅建築を繰り返しているようなもの。

しかも地球温暖化現象(*1)などが追い打ちを掛け、必ず毎年集中豪雨など発生する災害日本なのに、決して当初予算に災害対策費を組み込まず、年度末に予備費からチョロチョロ出して間に合わせようとす。初めから災害担当大臣を置いて、しっかりした省庁を造るべきだ。オリンピックの出費はやむを得ないが、終わったらその予算をそのまま継続し、災害復興を早く終え、災害予防費に向けるべきだ。後藤新平からほぼ100年経つが、どうしてああいいう大物がでてこないのかな。雑魚の集団だから衆愚院と私は意地悪を云う。

(*1) 地球温暖化による農業被害額…

農業・食品産業技術総合研究機構(つくば市)の2018年12月11日発表によれば、過去30年間(1981~2010)、世界で、トウモロ

コシ、小麦、大豆の年平均被害額は、424億8千ドル(4・8兆円)と、世界で初めて発表した。なお、コメは高温を好む植物ゆえ、減少していない。各減少率はトウモロコシ4・1%、小麦1・8%、大豆4・5%。

後藤新平の足元(岩手県旧水沢市)で生まれた大谷翔平君(生家が我が生家の近所)は、アメリカでは何と言っても新しい事に挑戦する開拓者精神が、尊重される国民性があるという。100年ぶり、ベーブ・ルース以来の二刀流が高く評価されたのも、新人王の決定要因らしかった。打者でも投手でも、大谷より上の者は多数いたが、二刀流が決定的支持を得たらしい。

*

自然災害や火山噴火・津波などは、巨大なプレートとの移動により、重い方のプレート(海側)が軽い方のプレートの下に潜り込み、そのひずみが積み重なって、一気に爆発という事なので、年間移動速度はせいぜい8cmぐらい故、たった10年がなんだというの? 積み重なったストレスは一気に爆発するのは何千年もかかった結果なのだ。従って地震予知連絡会議など誰も明確な予想など出しようもない。地味な科学者がそんな気の遠くなるような事を発言しても、政策上せひとも推し進めようとする政府や金を出す事業者などは、気の遠くなるデータなど聞く耳持たない結果が、先の東日本巨大地震や津波による原発事故である。1150年前の貞観地震は今回の東日本大地震と全く同じ場所である。

(*1) 地震についてはこの100年間に、マグニチュード(M)5以上の地震は世界の11%、M6以上は20%である。ところが日本の国土面

積は世界の0・25%（第62位）。M5以上の地震発生は世界の約2割である。なお活断層は2千本。活火山数は111座。特に関東地方は4枚のプレートがガッツンコに取っ組み合っており、世界にそんな例はない。

過去を遡れば、目を覆いたくなるような、大虐殺事件（*1）が目白押し。

（*1）世界の大量虐殺事件ワースト10。

①位…チンギスハーンによる大虐殺事件。被害者数2億人。②位…満清大虐殺事件1億人。③位…太平天国の乱、中国1千万人。

④位…中国、永嘉の乱、1千万人以上。⑤位…ドイツ。ユダヤ人大量殺害事件、600万人。

⑥位…ローマ帝国によるユダヤ人大量殺害150万人。⑦位…アルメニア150万人。⑧位…閔閔王殺胡令100万人。⑨位…ルワンダ100万人。10位…クメール・ルーヂュの虐殺、3000人。同じく1989年、

天安門虐殺3000人。

日本関係では、*1923年、関東大震災で朝鮮人大虐殺事件…推定60000人。

*南京大虐殺事件…根拠は明確でないが30万人と言われる。日本軍が南京で戦争俘虜・民間人を拷問・奴隷化御殺害



（編集部コメント）菅原氏は8月よりガン療養のため2度ほど入院退院され、現在は、10月31日に退院され自宅で療養中です。今回の原稿は以前に書かれたものです。1日も早い回復を願っています

地域に眠る埋もれた歴史（56） 木村 進

赤レンガ

私が石岡に来た今から13年ほど前は、街中の石蔵がよく目に付いた。この蔵の街を記録にとどめたいと思ったが、東日本大震災でかなりの蔵が傷んでしまった。しかし、もう一つ陰に隠れているのが「赤レンガ」の遺産である。これもかなりシンボリックな造形物として目に留まる。そこで、市内に残る赤レンガ造形物を探してみた。

○ 市民会館駐車場の赤レンガ塀

ここには「石岡酒造」という酒の醸造所があった。石岡を訪れた人の多くは、中町のレトロな建物を見て、国衛跡や総社を訪れると思う。この時、市民会館手前の現在駐車場になっている空地の塀のレンガに目を向けると思うがここに説明文はない。



五年程前まで一部が壊れていたが、今は補修された。昭和10年の地図には、ここに「石岡酒造会社」

の文字が読み取れる。そして、正面の市民会館の入口部には陣屋門があり、今の市民会館の場所には「実科高等女学校」が地図に書かれている。また、この石岡酒造の隣に今の室内プールある場所に石岡町役場があった。今から見るとずいぶん狭いところに集中していたものだと思う。この石岡酒造は市内の4つの蔵元が集まって、現在東大橋の近くにある「石岡酒造株式会社」となった。また実科高等女学校は明治45年に創設された町立の女学校で、後に県立に移管され、「石岡高等女学校」となり、現在の石岡二高（星の宮裏に移転）になった。明治34年発行の「石岡繁昌記」には当時の市役所について、「字土橋に在り、木造の二層家屋にして階上の大広間を以て町会の議場に充つ、階下は即ち町役場にして設備宜しきに叶ひ、事務の秩掌に至便なり」と書かれている。石岡史跡保存会という会が昭和8年、昭和11年、昭和30年復活し昭和48年まで活動されていて、今はこの当時の資料がかなりの参考になっている。ここにある市民会館は年度内で廃止となることが決まった。

○ 国分寺青柳新兵衛商店のレンガ塀

国分寺参道入り口にある倉庫塀です。以前は手前に車の車庫や居酒屋があったが取り除かれ、塀の修理もされた。表に回って見ると「青柳新兵衛商店」「青柳道場」「石岡食糧企業組合」などの名前と石蔵が目を引く。ここ青柳新兵衛商店さんは明治34年発行の「石岡繁昌記」には「米

雑穀、粕糠、石油販売店」となっている。



現在この青柳倉庫さんの南
通用門側にコンビニができ
ている。

○ 香丸町「酒の冷水」さん

酒造用レンガ煙突です。現在この煙突は震災によ
り破損し取り壊されています。



「冷水酒造」さんは「石岡酒造株式会社」として4
つの酒造元が合併した酒造元の一つでした。今は
この香丸通りで酒店を営んでいます。昭和10年
の地図によると、この場所は「角蔵酒造店」と書
かれています。また石岡の歴史（市制30周年記念）

によると「清酒醸造元 角蔵彦太郎」の文字があ
ります。



冷水酒造さんの赤レンガ塀

明治期には石岡や高浜は醸造の町と呼ばれるほど
（正岡子規の水戸紀行にはそう書かれている）、か
なりの数の醤油・酒の醸造所が集中し、大きな煙
突がたくさん聳えていました。

○ 富士色醤油跡

守木町郵便局のすぐそばに赤レンガ塀が残されて
います。意識して見ていないとこの赤レンガも見
ることはないでしょう。この守木町に「富士色醬
油」という工場があつたようです。



昭和10年の地図に載った
富士色醤油店の絵。



屋号は富士色（フジイロ）となっ
ていますが、一色さんという方が
やっております、昔は「一色醤油」と
なっていました。

我が労音史（10）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労
音の中心活動家として参加しています。そして、
労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の
中から学んだ内容を記述していきます。

1982年の社会情勢と音楽状況

この年、米日で二つの飛行機事故（犠牲者11
ポトマック川74人／羽田沖24人）が発生、多く
の人命が失われる。イギリスとアルゼンチンがフ
ォークランド諸島の領有権をめぐる紛争が勃発。
（イギリスの勝利で終結） 国連環境会議が、地球

温暖化・フロンガス被害等で「地球を守ろう」ナ
イロピア宣言を採択。ソ連共産党書記長ブレジネ
フが死去し、アンドロポフが後任として書記長に
就任。文部省の教科書検定で「侵略」の記述を改
定したことに、中国や韓国を始めアジア諸国から
抗議が殺到。政府は公共事業75%の前倒し、国債
の増発で景気浮上を計るが効果はなかった。運輸
省が26万体制、特殊法人への分割化の国鉄改革案
をまとめた。鈴木内閣が退陣し中曽根内閣が発足。
ホテルニュージャパンの火災で宿泊客300名が死
亡。(ナターシャ7のマネージャ榊原氏も含まれ
る)東北・上越両新幹線が開通、厚生省が老人医
療費の無料化を廃止。ニューヨークで反核平和の
100万人大行進が行われ、日本の文学者たちが核
戦争の危機を訴える声明を発表。「反核日本の音楽
家たち」が結成され、反核音楽会が三夜にわたり
開催された。文化庁降格の動きに対し、関係所依
団体が反対の要望書を提出。Sスピルバーグの
「E.T」が大ヒット。

この年、林家彦六、大栗裕、佐藤美子、山根銀
二、木下保、江利チエミ、灰田勝彦、Gゴールド、
Dモナコ、Rシユタイン、Lコーガン、Iバー
グマン、Hフォンダ、Gケリー(モナコ妃)
が逝去。

1982年の労音の動き

第31回総会は、労音会館で250人を集め開催
新三ヶ年計画の具体化、1982年度・1983年度・1984
年度の三期に分け、会員数2万名、3000サーク
ル、1000人の委員の組織目標と労音独自企画制作
で大衆音楽・クラシック音楽・伝統音楽の企画立
案更に大合唱、ミュージカルなどの立案、海外演

奏家例会と新人演奏家の登用、今までにない新形
式・内容を持つ企画制作。財政課題としては、30
周年記念事業基金の募集、組織活動と財政活動と
の結合による健全財政の確立。30周年記念事業活
動案では、この月に反核・平和をテーマにカン
タータ「人間を返せ」の上演、11月にはメルセデ
ス・ソーサ(世界的なフォーク歌手)と大作曲家
ルイジ・ノーノ(イタリア)の招聘、84年にはモ
スクワ音楽劇場ばれえの招聘が決定された。

「人間を返せ」は、東京文化会館に2例会
300名を集めたが、反核・平和の世界的な運動に
呼応した位置づけを明確にし注目を集めた。年末
恒例の「第九」では、10年ぶりにソリストをオー
ディションで選手、審査委員は大木正興を審査委
員長に、石丸寛・木村重雄・佐川吉男・岩井宏之
の諸氏と合唱団の実行委員長が担当。例会では演
奏前に石丸氏の実演による解説を入れて、「第九」
作品内容とクラシック音楽に対する理解を深め、
200名の合唱団で3回5800名組織した。

ポピュラー例会では、谷山浩子・細坪基佳・
天野滋・高橋真梨子・尾崎亜美・八神純子・岩崎
宏美など若年層に指示される歌手のリサイタルに
取り組み、個性が生かされ好評だった。中でも「高
石ともやとナターシャセブン」は地域例会(7ヶ
所)で3000名を組織し、新しい働き手が生まれ
れる成果があった。30周年記念例会として「布
施明例会」(新しい構成・企画)4例会8600名
を集め、卓越した歌唱力で聴衆を魅了し労音らし
い例会になった。高英男(シャンソン)や後藤悦
治郎が安定した歌唱力で聴衆を満足させた。

伝統音楽例会では、「中国音楽」(残留孤児二世
の出演)は、マスコミでも話題を呼び、文化会館

小ホールいっばいの聴衆を沸かせた。民族楽団「ふ
きの会」例会では、車人形による新作「佐倉義民
伝・甚兵衛渡し場の段」を4地域で取り組み、成
功させた。全国企画「第10回世界の民族音楽シ
リーズ」(タジック民族アンサンブル)は、小編成
ながら民族楽器・歌・舞踊、其々の名人芸が舞台
いっばいに披露され観客を魅了し、2回450名
が組織された。

例会外の活動は、第19回スキー友好祭が、高
石ともやとナターシャセブンを迎え、赤倉国際ス
キー場で680名の参加で開催。この年、国際婦
人教育会館で委員を中心とした、学習・交流集會
を開催し「労音運動の歴史と展望」について学ん
だ。此処では濱田滋郎氏を招きラテン音楽につい
て学習をし、初めてマヌエル・カーノ(ギター館
の動機に繋がる)の話聞く。創立例会の日(1
0月24日)に、30周年祝賀会が開かれ、多く
の専門家・音楽家(布施明・石丸寛・加太こうじ
等各氏)と労音運営委員150名が参加。また、

この年に、民族楽団「ふきの会」と「東京労音車
人形教室」は、イタリアのアーテル(公立劇場が
独自に、事業活動を行う時相互に提携し、交流を
計るための組織)の斡旋で7都市の公演とフラン
スのレーヌ市主催の「第9回世界民族芸術祭」公
園に、オランダでは王室トロピカル研究所の主催
公演に出演し好評を博した。同じ時期に、東京・
北海道・長岡・播州の各労音の民族音楽教室から
88名の代表が、アーテルの斡旋で、ミラノ・フ
イレンツェ・ベネチアなどを訪問(私が副団長と
して参加)し、新曲「さくら」で交流を深めた。

この年の春に伊豆の長岡で開催された、全国労
音交流集會には東京から160名の活動家が参加

(全体では400名)。小中陽太郎氏が「平和と文化を考える」で講演、民族楽団「ふきの会」と「東京労音車人形教室」による「新曲さんしょう太夫」が上演、そして各地労音民族音楽教室による合同演奏「新曲さくら」全体の交流会など、盛りだくさんの内容の集会になった。秋には東京の労音会館で82団体327名が参加して、第28回全国労音連絡会議が開催。80年から始まった、政府・地方自治体の文化施策「地方の時代」と「企業の文化進出(冠コンサート)」と言う新しい情勢について討議、それに対応した音楽鑑賞運動の在り方として、会員要求に基づく「共同企画の充実とその発展」を基礎に、四つの課題(全ての職場・地域・学園にサークルを作り育てる。年間共同企画の確立、「月刊音楽」の拡大と健全財政の確立。地元の演奏家と提携・協力。)を確認した。宇部音感が創立、全国の労音会員総数は77000人。

つづく



石岡市指定文化財(十七)

兼平智恵子

十一月末に久し振りに菖蒲沢薬師如来さまを訪ねました。

今回の石岡市指定文化財は菖蒲沢薬師如来さまです。

菖蒲沢薬師如来坐像 菖蒲沢三三〇―八

有形(彫刻)

昭和四三・三・十五指定

八郷地区のフルーツラインを過ぎ、朝日トンネルに入る手前の辻交差点を右折、間もなく左側に材木が置かれた場所の端に菖蒲沢薬師堂への駐車場が目にとまります。

およそ標高二〇〇mと言われている山中にありませんので、案内矢印にそって登り始めます。やがて古い校舎を思わせる建物の入口に「法相宗徳一法師御小屋跡」の立て札があります。菖蒲沢古道とも言われていますが、新しく補修されたコンクリートの道路上には、台風十五、十九号で落とされた小枝や落ち葉が散乱していました。山行の友と薬師堂やここから更に登る事、竜神様までは何回か来ていますが、最初に訪れた時の感動が心に残り、魅力となっています。

最初に訪れたのは平成十七年、ふるさと風の発行人に熱意を注いでいた、故白井啓治代表の先導でした。

その当時は、古道らしくまるで薬研堀に似た道なき道、落ち葉に隠された風化した石段を確かめながらゆっくり登る事二十分余り、大木と雑木に囲まれて、今までに目にしたことのないU型の趣のある境内。傾いた石段を下りると、朽ちかけた祠のある弁天池と落ち葉の積もった庭園。向かい側の石段を上がると雑木に囲まれた白緑の屋根のお堂。

入り口の引き戸もなく、壊れかけた本堂の中に、穏やかさと優しさに満ちた黒塗りの薬師さま。仁

王様に守られて、静かに鎮座されていた。よくぞ、心ない人に荒らされず、多くの方々の心のよりどころとしてお役目を果たされていたとすっかり魅了してしまいました。

今回訪ねました時は、お堂周りの雑木は刈り取られ広々とした境内に、お堂の入口は確りと閉められていました。それに薬師さまと対面すると、自動ライトが灯され、慈悲に満ちた和顔で迎えて頂きました。このところ思わしくなかった体調が快方に向かっている事にお礼をして後にしました。筑波山には四面薬師といわれる薬師が、椎尾(桜川市椎尾)、東城寺(土浦市東城寺)、山寺(石岡市小幡、現在は廃寺)、菖蒲沢(石岡市菖蒲沢)の四か所にあり筑波山を護る薬師如来として安置され、ごりやくある薬師様として広くそして厚く信仰されていました。

本堂に掲げられた説明板によりますと、この薬師如来坐像は昔から「薬師様」と呼ばれているが、坐像の形態は釈迦様に類し、真の薬師如来像はこの坐像の胎内にあったと伝えられている。二度の火災から村人に救われたが、記録を焼失し由来も不詳。

薬師様は檜材が用いられた寄木造りの半丈六(はんじょうろく)と呼ばれる大きさの仏像で、像本体の高さだけで一・四八m、台座と光背を含めると二・六七mにもなり、市内に存在する坐像としては、最も大きな仏像で大変貴重である。

平成二十年から二十一年にかけて修理作業が行われた際、胎内より見つかった墨書きから、貞享四年(一六八七)に東光寺二九代目別当寛泉(かんせん)によって作られた像であることが判明しました。

尚、薬師如来堂は伝承によると大同年間（八〇六〜八一〇）に建立。

正保三年（一六四六）大災

元禄九年（一六九六）再建

天保十年（一八三九）山火事により全焼

山門・鐘堂・堂塔・記録書類を焼失

天保十三年（一八四二）小規模に再建

昭和の初期までは各地から多くの参詣者が訪れていたとの事。徐々に人足が途絶えた後は地元の方の皆さんによって大切に保存されてきました。

駐車場の近くで農作業をしていた地元の方にお伺い出来ました。毎年八月第一土曜日から日曜日、万燈祭が行われ、堂内にある小さな行燈の和紙の張替え等行うそうです。その他参道や境内は四班の皆さんが交代で三か月に一回清掃され、薬師様そして二体の仁王様は地元の皆さんに守られ、愛されています。最後に一言“最近ぞろぞろと団体さんの見学が多くなりましたよ”

お仕事中貴重なお話し有難うございました。

参考資料 石岡の歴史と文化

○新しい時代の幕開け雅子皇后さまの笑顔

智恵子



遠い夏の夜

伊東弓子

小助は、今でもよく覚えていた。月の明るく夏の夜のことを。

その日は、川岸の仕事も入って少し懐が暖かかった。気をよくして飲み屋に寄った。夏祭りも近い、若い衆等が集まって笛や太鼓の練習に余念がないようだ。音が聞こえてくる。

「今夜は太鼓叩きに行くのはやめた」と、決めてのこの有様だった。酔い潰れて観音堂の縁に寝転んでいた。小助は、名前のように小さな体であったが、よく動き、力もあって、働き者だった。評判もよかったが、米の水は大好き、女親の小言の顔と言葉から逃れるために、一杯が二杯にそして三杯にと増えていつてのこの姿だ。と人の所為にしたりしていた。一方では、何とかしなくちゃと思いつながら、その日その日が過ぎていくのも空しかった。やっとの思いで七曲りある坂を、ふらふらしながら木立に纏まり上ってきた。月明りは木の間から射すが、慣れた道は酒の力と勘で歩いているようなものだった。

登りきった所で目の前を、白い影が通り過ぎていくのを感じた。引き寄せられるように白い影を追っていたが見失なった。何でもなかったと、打ち消すように歩き出した。また目の前に見えたように思った。酔った所為かと打ち消したものの、一人の女の姿がはつきり見えた。小助は藪に隠れて、じっと息を飲んでいた。次の瞬間、白衣を捲り上げ、太股を出して用をたし始めた。手で顔を覆い下を向いていた小助は、ああ、それ以上見ていなくてよかったです、思う半面美しいであろう女の姿を見逃したのも心残りであった。これも酔っ

た所為だ、と何回も何回も自分に言い聞かせながら、ふらふらと夜道を帰って行った。

その後、こんな話を黙っていても惜しい、誰かに自慢半分聞かせたい、と思いつながらも胸の中で暖めそおとしてきた。深酒はしまいと決めたが汗を流した後は足が向いてしまふのだった。必ず観音堂の縁に横になって月の明りを眺めながら、あの夜のことを思い出していた。不気味な気がして心は重い、でもこの坂を登らなければ家には着けない。坂を登り出すと、何かを期待する気持ちも湧いてくる己が恐ろしくもなった。夜はあの道は通るまい。万が一、通る時は走って駆け抜けた。嫁を貰ってからも口にする事はなかった。母親が出かける講での話しの中でも、話題になつていないようだ。おしゃべり女達の集いにも話にも出てこない様子に安心した。月の明るい晩になると、風情どころではない小心者の小助は家ん中がいと、決め込んでいた。依怙地を通して過ごしていた。老いてきた小助も七曲りの坂を登るのは辛くなってきたのも事実、スゥーと登れないもんかとも思いつぐらしていた。

谷津の草々が初冬の風に揺れ、里山の木々の紅葉が目に見える頃だった。向こう場に嫁いだ妹の亭主が漁先で亡くなった。通夜も葬式も済んで帰って来た夜道、澄みきった月明りは一層美しかった。目の前が明るくなって大きな白い鳥が歩いて行く姿が目に入った。小助たちのことを気がついていないのか、いないのかは検討がつかないが、長い首、長い尾、小助は今迄に見たこともなかった。それに夜、鳥が歩くかと何度も目を擦ってはみたものの夢の中ではないと思え、急ぎ足で追った。鳥は遠くへ小さくなってしまった。よい快ちで家

竜宮窟

小林幸枝

に急いだが、一緒にいた妻や息子には見えなかつたと言う。珍しい物を見たと言喜んでいたが日が経つにつれてあまりよい心持ちでいられた。それから数日後川岸の仕事で出かける朝、数日前に白い美しい鳥を見失った辺りで、けたたましいい声や羽音がした。ただならぬ雰囲気が伝わってきた。急ぐ足を止めた所に左へ曲る細い通りがあるのを見つけた。踏みつけられた草が傾いている。ここを行けば何かわかると思いつながら、先を急いで川岸に向かった。一日中仕事も手につかない状況だったがどう仕様もない。帰りは暗の中を家に急いだ。次々に用が出来、焦る気持はあっても思うようにいかず時が流れた。木枯しの吹く日だったが、小助はあの鳥の行った辺り、鳴き声のした山道へと出かけて行った。すっかり草も枯れた細い道の先に林の近くに木小屋があった。白い鳥の羽根や獣の皮や毛が小屋の柵の外にも飛んでいる。柵の中に鳥の姿も、獣の姿もなく骨すらなくなつて白い羽根と獣の毛で一杯だった。あんな大きな鳥が、こんな狭い所に入れたらどうするか、獣が入つてきても逃げられなかったこと思うと、小助は哀れ哀れで仕方がなく、夜な夜な歩いてきたのは魂しいかなと思ひにふけた。この国にいる鳥ではない、海を越えた遠い国の鳥だと聞いた。またまたびっくりするだけだった。

年月が経つて小助も白毛交りの爺さんになった。月の明りも厭がらずに見ることが出来るようになって猪口を傾けていた。あの出来事はいつたかなんだったのか思うばかりであった。

数年前、伊豆下田に行った事がありましたが一「竜宮窟」の事は知りませんでした。ここは観光の穴場だそうですが、珍しい穴だね、と思いました。本を読んで、これ！と知りました。

伊豆半島南部、下田市の海岸にあります。入り口に看板があり、そこから階段を下ると、周囲360度を崖に囲まれた秘密のビーチのような洞窟の中に降り立つのです。頭上の大きな穴から光が差し込んで、ぼつと明るい洞窟です。この竜宮窟は、岩壁を波が侵食して作られたもので、「海食洞」と呼ばれます。初めは横穴型だったのが、海の侵食によつて海食洞ができ、天井が崩れて天窓ができたため、夜の星空も神秘的に美しく眺められます。竜宮窟の中からキラメル色をした崖に近づいてみると、縞模様が目立つ地層が見え、地層は海底火山が噴出した小石や火山灰が積もつたもので、もともとは海底の一部だったようです。

伊豆半島は、伊豆大島や新島などと南へ一列に並ぶ火山列島の一つだったので。伊豆・小笠原弧と呼ばれるこの火山列島は1500万年前から、プレートに動きに乗って本州に南からぶつかり続け、100万年ほど前に、大きな島が本州と合体して伊豆半島ができました。このかいどう衝突によつて海底だった地層が隆起して地表に現れたというわけです。

竜宮窟のある伊豆半島は、最南端にある石廊崎、海底火山の溶岩と陸上火山の噴出物からなる荒々しい景色を歩いたり、遊覧船からも楽しめます。伊豆半島の北には丹沢山地となり、日本列島の形成を知る上で重要なポイントとなっています。



父のこと (15)

菊地孝夫

入会に当って、その理由を書いたけれど、ひとつ書かなかつたことがある。「風に吹かれて」と言う白井代表の表題に惹かれたのだ。

これは、ボブ・ディランの有名な楽曲名と同じである。

ご承知のように彼はノーベル文学賞を受賞した。歌手に文学賞とは、と異論もあったようだけれど、その歌詞の完成度の高さは、度々候補に挙がっていたという事でも判るように高く評価されてしかるべきものだと思う。

隣接する土浦市の医師でもある佐賀純一氏の書かれた「浅草博徒一代―アウトローが見た日本の闇」と言う著作があり、その新潮社文庫版のあとがきに、一連のボブ・ディラン騒動がつつられている。

それによると、二〇〇三年五月「イーグ・ジョナサン」と言う未知の人からメールがあつて、その大要は、ボブ・ディランの最新アルバムの中の6曲の歌詞が、「浅草博徒一代」英題 The Gambler's Tale (博打打ちの物語) 1991年出版」の文言と極めて類似しているというものであつた。

同年7月に「ウォール・ストリート・ジャーナル」1面にこの記事が掲載されるや、大きな反響がまき起こり、欧米メディアの取材が佐賀氏に殺到した。

この作品の主人公・伊地知栄治は、波乱万丈の生活の末、縁あって石岡市が終焉の地となる。

栃木県の裕福な家庭に生まれながら、身を誤ってアウトローに転落する主人公の伊地知栄治。

佐賀氏の巧みな語り口によって、昭和初期の日本のありさまが、裏社会を通して見えてくる。

たまたまその最後に関わったのが医師であり作家でもある佐賀先生だった。

彼の生き方のあまりの面白さに、ついにはテープレコーダーをもって往診するまでになる。彼の死後、その聞き書きを一冊の本にまとめたものが「浅草博徒一代」となった。

私が若いころから好きだったボブ・ディランと、この石岡の地が不思議な縁がっていたことになる。

入会してから、白井代表に確かめると、「風に吹かれて」は「ボブ・ディラン」とは関係なさそうだ。

どうやら私の早とちりだったようだ。白井先生の墓碑銘には1字だけ風と有った。

〈台風〉

9月末から、東日本を立て続けに台風が直撃した。

15号台風では千葉県などで強風により、大規模な停電が発生した。10月13日の19号台風そして10月27日の21号では、記録的な豪雨

で、各所の河川が氾濫した。

この石岡市も、17号では停電、19号では初めてとなる全員避難の警報が出された。幸いなことに、被害は少なかった。

三重県から東北にかけて広範囲な被害があり、10月28日時点でもその全容は判っていない。

農産物の被害は1000億円を超える。各施設の被害も大きい。家屋は損壊し、道路も壊れた。被害総額は、5兆円ほどになるだろうか。

消費税が2パーセント上がり、そこへもってきてこの災害である。

地震と違い台風は、近年の予測技術の向上によって、進路や雨風の量など相当正確に予見できるようになっている。それでも今回甚大な被害を出している。自然災害に対応するのは、まだ人知の及ばないものがある。

一方で、例えば避難所には、学校の体育館があるけれど、木の床にシートを敷いたぐらいで、毛布一枚、ペットボトルの水1本、仕切りもない所に雑魚寝と言った有様。

3・11の時の教訓は、いったいどこに生かされているのだろうか？

簡易段ボールベッドや、簡易間仕切りなどの製品が開発されている。足腰の弱い老人たちは、床面から立ち上がるのも一苦労である。公営住宅の開放や、非常電源設備の用意、簡易浄水器の設置など普段からできることはたくさんある。

電源喪失によって、生活が成り立たなくなつた。今の文明社会では、電気に頼ることが大きい。スマートホンなどの情報機器も、バッテリーが切れ

たらおしまいである。経団連が、地球温暖化による災害の多発に対し

て、対策を講じなければと言いつつ、全く遅きに失した感がある。

高度な文明化社会は、一方でその発達したテクノロジーの脆弱性によって、いったん事があるとたちまち原始時代に逆戻りしてしまう。太陽の活動が活発になると、大規模な磁気嵐が起こり、通信障害が起こる。スマホが使えなくなり、それに頼っていた人々はたちどころにお手上げとなる。

余り多く報道されていないが、フクシマでは保管されていた低濃度の放射性廃棄物が流されてしまった。また原発の地下水は、この豪雨によってより多く海洋に流れた。トリチウムは自然界にも存在し、大量の海水によって希釈され、人体に対する影響はほとんどないと主張している人々がいる。はたしてそうか？

〈制度疲労〉

オリンピックのマラソン・競歩を札幌で開催という話が持ち上がった。東京での開催は、暑さにより無理だというのだろう。先ごろ行われた中東ドーハでの開催で、多くの棄権者が出たのが要因だろう。

いまさら何を、というのが率直な感想である。いくら鍛えたアスリートとはいえ、高温多湿の環境下での競技には、生命の危険すら感じられる。

東京でのこの時期の開催は、無理があると始めからわかっていたはず。対策の一つが、舗装を照り返しの少ないものにするというものがあつた。

けれどもそれは、舗装面では多少の効果があるものの、地上1メートルより上で測定すると、全く効果のないものと判明している。

水蒸気ミストによる冷却という案もあるが、これも効果がさほどではない。

小池知事はこれに反発。彼女はあくまで「トウキョー・ファースト」であり、選手の健康など二の次であると考えている。先ごろドーハで行われたマラソンや競歩などでは、高温多湿のため多くの棄権者が出た。

競技日程は、アメリカの3大ネットワークの一つが、オリンピックの最大スポンサーとなつていくことから真夏の開催となった。10月はアメリカカンフットボール、野球、バスケットとアメリカのプロスポーツが目白押しのため、8月開催となった。

いつそのこと、やめてしまえばいい。もともと、運動音痴なので、スポーツにはさほど関心がない。演出された感動シーンなどは、しらけるばかりである。

これが「おもてなし」の心といえるのだろうか？ラグビーの世界大会が日本で行われている。アジア初とのこと。先日までは、バスケットボールが連日のように取り上げられていた。来年のオリンピックに向けて、盛り上げるために連日くどいほど報道されている。今の時点（10月19日）で4強突破なるか、という成績である。強豪に立て続けに勝っている。ホームゲームである利点、選手の半数が、スカウトされた外人であること、これらを勘案すれば、勝つて当たり前だろうというのが素人の私の感想です。

ラグビー協会は森喜朗元首相がドンである。IOC・JOCの金まみれ利権体質は一向に無くならない。テコンドウでも問題発生。文科省傘下のスポーツ庁も同じ穴の貉。

どうもこうした上滑りな風潮には、同意しかねる。

〈原子力発電のこと〉

関西電力は、敦賀の高浜原発を巡って、幹部が高浜町の助役から数億円の金品を貰っていたことが発覚した。去年の夏の時点で、内部調査が始まったというから、発覚はもつと以前だったろう。しゃあしゃあと言いつつぬけてきた会長以下の幹部たちは、明らかな犯罪行為をどう言い逃れるのだろうか？

日本郵政の簡保保険の不正勧誘も、話題となっている。

いずれも上級の幹部たちは、疾うに逃げようと画策している。

所管官庁の経産省の菅原大臣が、選挙違反容疑で辞任。このタイミングで、過去の不正疑惑の浮上は不自然に思える。国会への関電幹部の証人喚問は、これでうやむやとなってしまうだろう。

〈ざれうた〉

このごろ都にはやるもの

電気の消えた真つ暗闇
助役からの袖の下

菓子の下には金のかね
責任取らぬ経営陣

生命保険の騙り詐欺
NHKには脅しかけ

五輪みこんだ宿稼業
かぼちゃ遊びの土手かぼちゃ

につぼんチャチャチャのばか騒ぎ
先生同士のいじめあい

教育できない委員会
居座り続ける議員様

カジノ作りにひた走る

〈占あれこれ〉

部屋の模様替えをした。ついでにパソコンのモニターをテレビにとりかえた。今のテレビはただのテレビから情報機器へと進化している。

リモコンひとつでテレビから、DVD・モニター、パソコン・モニターへと自在に変化する。ここ数年のIT技術の進歩は目覚ましいものがある。小生などは、この変化にそろそろついていけなくなってきた。

AI（人工知能）の研究も進んでいる。やがては人類の生活を一変させるかもしれない。21世紀は機械の脳が主役となるのだろうか？

天気予報を例にとるまでもなく複雑な数値を瞬時に解析する。何日も先の気象を広範囲にわたって予測する。その確度もどんどん正確になっていく。これには、「多変数解析」とか「フラクタル理論」という数学の手法が使われている。

現在急速に進んでいる量子理論を応用した量子コンピュータが実用化されれば、いままでも不可能だった「多変数解析」が可能になる。そうなれば台風の発生も事前に予測でき、その進路も正確に予測可能となるかもしれない。ことしの石岡市の降雨量も予測でき、「明日は102ミリの大雨が降る」と警報も出せる。これは「予報」ではなく「発表」である。AIの進歩で真つ先に失業するのは気象予報士なのかもしれない。

DNAの解析技術が進化すると、それによって寿命まで予測できる時代がやがては来るのだろうか？

横浜にいた学生のころ、繁華街で父は大道易者に呼び止められ、見てもらったことがあったという。易者が言うには「あなたは将来偉くなる」とか言われたらしい。兄もいつだったか易者にそう言われた。実は私も、自分から金を払ってみてもらったわけではないが2度ほど易者に偉くなる、と言われた経験がある。また一生食べるものに困らないとも言われた。残念なことには、それらがことごとく外れてしまった。

レーガン元大統領の夫人・ナンシーは占星術に凝っていた。政策の決定に当ってしばしば夫に助言をした。かつてのアメリカの政策がひどくいい加減だったのはこのせいもある。取り巻きのいいがわしい占い師がいい加減なことを言ったに決まっている。結局そのために地域紛争が起き、多くの人命が失われた。

権力者、富裕者などの周辺にはこうしたいかがわしいペン師連中が、砂糖にたかる蟻のように数多くむらがり集まってくる。

むかしの中国では、戦の前に占い師に戦争の勝ち負けを占ってもらった。勿論戦場にも連れて行った。もしも占が外れて戦に負ければ、彼らはたちどころに首を斬られた。占い師も命がけであった。そこで手品を使って予言を本物に見せかけようとしたりもした。また怪しげな術でもって敵方の将軍を呪い殺そうとしたりもした。

当時の皇帝の後宮では大勢いる妃たちが互いに競争相手を呪い殺そうとした。真夜中に相手の髪の毛をその人物の名前を書いた人形に入れてその手足に針を刺した。これを「巫蠱（ふこ）の術」と言っていたたびたび厳しく禁じられたが、なくなることはなかった。万一露見した場合は、関係者全

員が死刑となった。

これに似たようなものは「丑の刻参り」として日本にも伝わっている。現在でも、行われている。

このため歴代皇帝の実名は、身内以外使うことを厳しく禁じられた。もし一般のものが使えば、謀反の恐れありとして、「九族の刑」にあたるという族皆殺しにされた。

（これとそっくりなものが中南米に広まった「ブードウ教」の中でも行われている。アフリカに起源をもつそれはアメリカに渡り、黒人奴隷たちの信仰を集めた。無理やりキリスト教に改宗させられたが、こっそりと言い伝えていたのである。奴隷のなかにはこの術をつかうものがあり、黒魔術と言って現在でもブラジルなどでは盛んである。）

軍師として有名な諸葛亮・孔明もたびたび卜占をおこなっている。「三國志」「三國志演義」のなかでは、祭壇を築き、天に祈って大風を吹かせ自軍を勝利に導いたとされている。

古代に、世界有数の科学知識を持っていた中国であっても未来の予測はこういった頼りないものを信ずるしかなかった。

日本もまた例外ではない。昔の神社は卜占を行うのが常であった。それが神官や巫女の重要な役割であった。次期天皇を決めるにあたっては卜占に拠ったりした。

先の大戦でも、「神風」が吹くとか言っていたではないか。

ちなみに旧日本軍では「神風特攻隊」は「シンブウ」と呼ぶのが正しいそうである。

現代でも、毎朝のテレビでは星座占いが行われている。一部の新聞にも占が載っている。書店に

も占の本が山積みされている。

筆者はずっとまえから、それらを掲載している新聞社やテレビ局の報道は頭から信用しないことにしている。

もしも彼らの占が本当に当たるのならば、なぜ彼らは三・一一の災害がまったく予想できなかったのか？

何故先般の北海道の大地震が予測できなかったのか？

地震列島日本ではどこで地震が起きてもおかしくはない。出鱈目な地名や日時を言ってもそれが的中してしまうことは確率的に言って十分にありうる。「明日、九州で大地震が起きる」と予言してそれが的中してしまうことは高い確率でありうることだ。にもかかわらず過去にそのような例はひとつもない。

個人の未来しか予測できないのだろうか？それなら東北の人たちが占を聞きに行ったとき、あなたの家は津波で流される、高台に逃げなさい、原発が爆発して放射線がまき散らされる、とか当然言われた筈だがそのような話ほとんど聞いたことがない。

テレビに登場して、「あなたの前世は、戦国武将の織田信長で、あなたはその生まれ変わりです。その証拠に、あなたの叔父さんか誰かの名前には、信長の文字がついているはずですよ。」とか、「あなたの運勢が悪いのは、北にドアのあるうちに住んでいるからだし、一人息子に嫁が来ないのは、三年前に死んだ飼い犬・ポチをきちんと供養しなかったためですよ。」などという。前に座った素直な客はどれもすべて的中しているので、たまげってしまう。

これらには実は種があつて、事前に近所ですら
ーチしているのである。数多く来る応募者の中
から、これらと思う人物を選ぶわけである。それが
いなければ、劇団の売れない役者を雇えばいいの
だから簡単なのはなしである。親戚に「信」や「長」
のつくものがいてもなんら不思議はない。

したり顔で天を仰ぎ、おごそかに告げれば、
「ははあ、こりやあてえしたもんだ、おつたま
げた。なんでもわかっちゃうんだ。さつそく村に
帰つて、皆の衆におせえてやっぺか」と感心して
しまう。

財界人や政治家なども、こつそりとこれら有名
占い師に見てもらうケースがままあるということ
を聞いた。

その際に選挙区の自然災害などの警告は受けな
かつたのだろうか？

大手企業の経営者が占い師に景気の先行き、投
資の可否など尋ねているはず。その割に景気は一
向に良くならず、企業の収益も実際のところは伸
び悩んでいる。

このイカサマ詐欺師連中に、一体いくら金を
払つたのだろうか。これらの連中がテレビ画面に
登場して、好き放題を言っているのを見るたびに、
内心不愉快になりチャンネルを変えることにして
いる。

嘗て有名占い師・藤田小乙女がハワイの自宅で
親族だかにあっさり殺されてしまったこともあ
つた。江戸末期の有名な占い師によると、他人の
未来は予見できても自分の未来だけは予測不能だ
ということだ。

以前に「ノストラダムスの大予言」という本が
大ヒットし、西暦2千年に地球規模の大災厄が起

こるとかで大騒ぎになった。出版社は続編をいく
つも出版して大儲けをした。連日のようにテレビ
各局で放映され社会的事件にもなった。
昨年、著者が実はあれはフィクションであつた
と告白した。

兄・康夫もこれらの本を読んだのか、なにかの
おり、手のひらを広げ、

「俺は長生きできないんだ」と言った。

(家の物置には祖父の集めた古い占いの本がど
つさりあつて紙魚(しみ)のえきになつていた。
いつごろからか占いに凝つていたらしい。対照的
に父・敏夫はそのようなものには全く興味を示さ
なかつた。母・サトは晩年、毎年のように神宮皇
學館の暦を買つていた。私は暇つぶしに時折それ
をばらばらとめくつていた。)

祖父・順造の残した分厚い占術の専門書の奥書
によれば、人の為の占いで金儲けをしてはならな
いと書いてあつた。そのようなことをすれば以降
占いが当たらなくなるとのことである。

中国の占を代表する書物には、「易经」がある。

血液型占い。姓名判断、四柱推命、西洋占星術、
トランプ占い、観相、手相、タロット占い、筮竹、
算木、風水、等々。洋の東西を問わず、人々は占
が好きである。

未来が予見できるのは、「神」「仏」の領域であ
る。たかが二足歩行の哺乳動物にはこんな技は出
来っこ無いのである。

やまと暮らし(33)

やまと女

台風シーズン・・・15号19号と立て続けに来
襲！中部・東日本に大きな被害をもたらせた、
今までは、西日本に大きな被害が定番だった、な
んかおかしいな・・・。

●スーパー台風来襲・・・

・朝から強い雨風が吹き荒ぶ、防災無線は外出
を控えるようにと・・・なんでこんな日に・・・
今日はだいたい前に予約した高齢者講習。市内のあ
ちこちの施設はどこも休みなので、講習所も休み
だろうと思いつながら電話をしてみると・・・やつ
ていますよ。さんさん迷いながらも小降りになつ
た所であけてみた。講習所は講習を受ける人4
人。その他2く3人でひっそりしていた。教室
での講義や目の検査のあと、実車、その時は土砂
降り、慣れない車で見えず怖かった。そのた
めかいつもよりおまけしてくれたようだ。これで
ひとまずほつとして。今回は3年後・・・。

・テレビの映像からは目を疑うような光景が、
被害の状況はあまりにも広範囲すぎてはつきりと
は分からない、一刻も早く穏やかな生活に戻れま
すよう祈るばかりです。今日は東京で友人のライ
ブの日、台風の後かたづけも済んで、駅まで車を
走らせた。改札を入ろうとすると、駅員さんが常
磐線止まっているよ・・・、ガガガン、なんて
こつちや、急いで友人にメール、行けなくなつた！
何ともさんねん！

●カフェオリーブでエコクラフト・・・

・エコクラフトの日、笠間でエコクラフトを楽
しんでいるグループの方5人が遊びに来てくれ

【風の談話室】

《読者投稿》

て交流した。素敵なブローチ作りを教えて頂き、とても刺激になった。

・ こんこんギャラリー・・・気になる場所でありながら、足を運んだことがないというので、みんなでおじやました（エコクラフトを一時間繰り上げて）。展示は大森さんの花の世界。素敵なりーヌやオブジェが飾られていた。その中に師匠製作の「つたの花入れ」と大森さんとのコラボ作品が、何ともおしゃれに飾られていた。入口に飾られた秋の野の花も優しかったですね。

● 秋日和・・・

・ 今日には本当に気持ちのいいお天気だった。竹の師匠の庭もシユウメイギクが咲きジンジャーの香り漂い、遊び場の山にはポポが食べごろ、サルナシの実もたわわに実り、竹の方は早々に切り上げ周りの散策を楽しんだ。

・ キンモクセイが咲いた。我が家の生垣に金木犀がいい香りを漂わせている。この香りが漂う頃は大秋柿も食べ頃。知り合いの柿農家さんへ遊びに・・・。大秋柿は人気であちこちから注文が来て大忙し。さくさくとした歯ごたえ、そして甘く美味しかった。

・ 今の季節は？我が家の庭に、先日からゆりの花が開いた、スカシユリかな？山つつじもたくさん花を咲かせていた。なんかおかし・・・

・ 竹の師匠から頂いたポポの実。一見アケビを思わせる外観、マンゴーを思わせる香り。しかし、熟成が早い。そこで、種を取り除きペースト状にして冷凍保存した。ヨーグルトとか食べるとき少しづつ割って食べている。そのため薄くジッパーに伸ばしておいた方が取りやすい。また、しばら

く楽しめそう・・・

・ 1泊した東京からの友人、今回は笠間散歩を、10月半ばからは菊祭り等で大賑わいだが、この日は静かな笠間稲荷神社をお参りしたり、ギャラリーをのぞいたり、のんびりとお喋りして・・・。

・ 来春に向け球根を蒔こうと花壇の手入れを、そこに毎年ツタが絡まっついて厄介な場所がある。ツタを手繰り寄せてみると、むかごの実ついている、山芋だ・・・。よし、掘ってみようとシャベルで土をかき出しながらの格闘2時間。土の中には縦やら横やら何本もの山芋が交差、折らないようにシャベルを入れるが深すぎて残念ながら、折れてしまった。それでも相当の量を獲得。自然の恵みのおかげで今日のお昼はとろろそば、夕食は山芋ステーキかお焼きもいいな？これでしばらくは消費税アップとも戦えるかも・・・。

● 諸々・・・

・ 恒例まんまやコンサートに参加、ピアノ・フルート・クラリネットのトリオ。いつもながらの楽しいコンサート。開演前に頂いたお蕎麦も美味しかった。休憩時間のコーヒータイムにはおなじみさんとの楽しい会話。次回の再開を約束して・・・。

・ みんなが、コロのことを心配してくれる。何度か入院したが、夏前は比較的元気だったのに、ここところ足がむくみ一部化膿。利尿剤や抗生物質の注射で大分改善し、自力でご飯を食べるようになった・・・。然し大半は寝て過ごし一歩も歩けない。果たして何歳なのか、獣医者のカルテには2002年に初診療。その前は隣に来ていた、獣医に薬をもらっていた覚えがある。19歳なるのか

な・・・？毎日ほっとしたり心配したりの一喜一憂。有難い事にご近所さんも一緒に心配してくれる・・・。

《風の吹き》

冗話オンパレードその① 菅原茂美

どうやら私は堅物の様に見られているらしいが「小便するだけの道具となりにけり」と来ては、脳ミソの方も柔らかくしなやか。

◎ド近眼の私の友人Y氏は、すごい記憶力で、囲碁5段。視力検査の折、検査表の文字の位置を殆ど暗記。万全を期したが、いざ検査が始まったら検査員の指す棒の先が見えなかった。慌てたカンニングも徒労に帰す。

◎ある農協の職員。大農家の御曹司。長男故、この大黒柱の様にしっかりしろ：と言われて育った。しかし、どこへ行っても超ノロマ。歳をとるに従い会話・行動、皆異常。そうしたある日、大黒柱に向かって、『てめーのために俺がどんなに苦しんだか知ってつか？』と怒鳴りながら、鋸を持ち出し、大黒柱をギーコギーコと撫で斬り。汗を拭き拭き満足顔。

◎私が大学寮に入った時、真っ先に先輩から受けた教育は、畑からリンゴをかつばらって来い。もいだリンゴはリュックに詰め、上を縛って逆さまに背負え。監視員に見つかったら、紐を解きリンゴを捨てて、素早く逃げろ。

◎ある村の老齢徘徊者。近隣の皆が集まり、山など搜索したがついに見つからず。翌朝なんと高圧鉄塔を囲むバリケードに、着物がアチコチ引つ掛

かり、大の字に手足を広げ、身動きできず、一夜を過ごしたらしい。

◎私の知っているある夫婦。なんと3回も、奥さんと離婚・再婚。浮気相手に『奥さんと別れたら結婚してもいいよ』と言われ、すぐ本妻と離婚。折角離婚したら『やーだよ』と逃げられた。凝り性もなく、その繰り返し。

◎現役時代私は、車2台8人で宮古市の浄土ヶ浜国立公園へ到着。渋滞など考え土浦を前日午前出発。スイスイ走ったら、翌朝5時前に着いた。空腹だが店は開いていない。やむなく自動販売のカモメの餌のパンを買い、カモメにやったりしていたが、試しに食べてみたら、ワカメが入っており、とてもおいしい。全部買い占め、腹ごしらえ完了。次へ出発。

◎ちよいと下ネタ話。私は10年くらい県庁や水戸の出入りへ電車通勤。下り友部駅へ電車が付いたら、多数の客の中に、背が高くすらりとし、白いパンタロンの美人が乗ってきた。どういう訳か私の目の前に立つ事になり、座っている私の目の前に彼女のヒップが位置。失礼ならぬよう眼を細めてよく見ると、パンタロンのチャックが、一本の陰毛をしっかりと食い込んでいた。空気の動きでユラユラ。白と黒の妖艶な芸術作品。その日は、一日中、私の頭はフワフワ。仕事にならず。

◎ある知人。浮気ばかりで奥さん泣かせ。昼にソーマンを茹で、奥さんは先に食べ、昼寝のごろり。後から帰ってきた亭主、ソーマンを食べようと自分で用意。『薬味は？』『ネギなら裏の畑にあつぺ！』と起き上がらず。

◎農村のある婆さん。嫁に米を盗んで売られたら大変と、米箱のコメを均して字を書く。これでは

手のつけようもない。すると昼は婆さん一人で留守と知ってか、漏電を調べに来たというそれらしい客に、早速お茶の用意。動作は鈍いから時間がかかる。客は奥の部屋を片っ端から探し財布を奪って、さあお茶をどうぞと言ったら、とつくにドローン。あれほどケチな婆さんも、セキュリティは甘い。

◎ある農協での出来事。達磨ストープに弁当を載せ、一斉に昼ご飯。ある中年職員が、弁当を開いたら、あれほど梅干しが嫌いとか平日頃俺が言っているのに、今日はでっかい梅干しが入っている。うちの嫁は根性が悪い…とかなんとか大騒ぎ。すると、後からある職員が、俺の弁当がない、と騒ぎだした。開けたのを見ると、先に食べたあのおじさんのもの。さつさと他人の弁当を食べ、嫁の悪口をさんざんほざいていた顔のおかしい事。

◎オーストラリアのあるプロゴルフ大会。あるホールでボギー11を叩いた御仁がいた。ティショットが池ポチャ。水際だったのでアイアンで2度叩いたが上がりならず。やむなく球を拾い、眼の高さから落としたり、石ころに当たり、何の弾みか、脱いだ自分の靴にポツンと入ってしまった。その後、ラフやOBで、終わったならこのホールだけで、11ボギーとか。

◎私が中米に国際協力事業で滞在した時、日本人単身赴任者は、現地の家政婦を雇い掃除洗濯など頼んでいた。何もかも自分で掃除洗濯などやろうものなら、けちな悪人というレッテル。やむなく現地人を雇うと、冷蔵庫に買ったビールや食材は、家政婦が友達を呼んで全部料理をして食べてしまう。豊かな者は、貧しい者に分け与えるのが当然との事。

【特別企画】

打田昇三の将門記 「罪と名声」(1-2)

貞盛の苦衷

此の事件は現地住民ばかりで無く多くの人々を驚愕させた。その頃、国香の嫡男・平貞盛は早くから都に出て公務員生活をしていたが、故郷からの急報を受けて驚いた。父・国香の死もさることながら、一族同士の争いに呆然としたのである。

将門は従兄弟であり、戦って負けた前常陸大掾・源護と其の息子たちも親戚である。身内の争いで大勢の死傷者が出た上に実家が父親もろとも焼かれてしまったショックは大きい。先ず第一に家と夫を失った母親の事が案じられたが、現代の公務員と違って直ぐ年次休暇・忌引休暇が取れないから常陸国へ駆け戻って来ることも出来ない。

幾日かは呆然とした仮で過ごしていたが遂に上司に申し出て帰郷の許可を貰った。原文には「公帰於旧郷」と書いてあるだけなので、帰郷の状況は分からないが、とにかく知らせを受けてから暫く経って常陸国に戻り、先ず自宅へ行ってみると完全に焼け跡だけになっている。

何よりも、しなければならぬのは現場から父親・平国香の遺骨を拾い出し、次に何処かに避難したのである。母親を探し出すことである。焼かれた屋敷は誰も手を付けていないので、国香の遺骨は回収が出来ると思ったが、焼け方が酷くて馬などの骨と区別がつかず、適当に集めた骨をその場に埋葬した。昭和三十年頃までは「伝・国香の墓(私有地)」が残っていたけれども、筑波研究学園都

市の影響で、今は様子が変わったと思う。

母親の行方は分らず、原文では「巖の限（いわおのくま）に問う」とあるが、蜥蜴では無いから岩の間には居ない。どうにか避難先を探したのだと思う。京都では官僚として恵まれた職に付いていた貞盛であるけれども、故郷に戻ってみれば父の焼死体を求め煤（すす）けた母親を探す悲運（古代中国の伝説にあるような悲運）に見舞われることになった。それでも近隣の人々から情報を貰って、母親、本妻から愛人まで無事に回収することが出来たのである。ただし火災が二月四日で貞盛の帰郷は四月頃と推定されているから焼け跡は数か月間も放置されていたのであろうか？

帰国を許された平貞盛は現地で喪に服して、その間に父親の葬式・法要なども済ませたとする。素朴な疑問で各地に放火し攻撃してきた将門との関係がどうなっていたのか気になるが原文には「：貞盛、つらつら案内を検するに：」とあるから自分が居ない時に起こった事件について、少しずつ検証を始めたのであろう。其れによって分かっていたのは父親の国香と将門とが最初から敵対していたのでは無いということである。常陸国に土着していた源護一族との関わりから攻め滅ぼされたという経緯が明かになったのである。

諺（ことわざ）に「賤しい者（地位の低い者）は高貴な者に従い、弱い者は強い者に譲る」と言うのがある。昔の諺であるから民主主義には反するが、事件の経緯を聞いた貞盛は、取り敢えず此の場で将門への報復などは考えないことにして荒らされた地域の復興に心掛け、先の見通しが立ったならば、自分は元通り都に戻って官僚として出世を心掛けよう：と決めた。

しかし将門と対立した俣では不安であり特に母親などを残して置く心配も有る。此処は昭和二十年八月に誰かが考えた「勅語」のように「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで：」と言う安っぽい文句で将門と講和条約を結ぼうとしたのである。

良正の画策

テレビドラマや小説の面白さは、平和的な日常に思い掛けない出来事が起こることであるうけれども、此の事件でも平貞盛が苦渋の判断とも言うべき「将門との和睦」を決心したところに、突如として出（し）や（ば）つて来た人物がいる。それは貞盛の叔父に当たる平良正である。現代では不適切な表現と言われそうだが原文に忠実に書くと、この良正は妾（めかけ）の子、つまり貞盛の祖父・上総介高望王（平高望）が何処かに困って居た愛人に産ませたのが平良正らしい。嫡出では無いから桓武平氏一門でも軽く見られていたようで後に「日本外史」を書いた頼山陽は高望王の子にもしてない。コンプレックスか有るから、何か注目されようと余計なことをしたとも考えられる。

それは兎も角、此の良正と兄の良兼とは、将門に合戦を仕掛けた源扶の一族と縁組みをしていたと思われる。つまり、義理の身内が将門に負けてしまったから何とかして仇討をしなければならぬ立場にある。或いは平良正は、最初から「将門襲撃事件」に加わっていたのかも知れない。原文に「将門との因縁を思い浮かべ車輪のように走り回っていた」とある。将門憎し！の執念で常陸国内を掛け回り義勇軍では無く偽憂軍を募集し続けたのである。一方、良兼の方は筑波山麓に少し領

地は在ったけれども本国は上総国であったから未だ晴れの舞台？に出ては来られない

川曲（かわわ）村の戦い

原本には「：此処に良正、偏（ひとえ）に外縁の愁（うれい）に就き、卒（にわか）に肉親の道を忘れ：」と書かれている。つまり平良正は自分の縁戚である源氏の立場だけを気にして、一方的に身内の将門を悪者にした：と言うことである。思い込みは恐ろしいもので、何とかして将門を討つことばかり考えていた（：それが実行出来るかどうかは兎も角として：）のである。

当然だが、息子たちが奇襲攻撃を掛けて将門に敗れた源護は、此の計画を聞いて大喜びをした。そうなるも良正も、報復計画を頭に描き、口に出していただけでは済まなくなり「実はあれは冗談でした：」とも言えなくなってしまった。洪々と合戦の準備を進めたのである。

情報は秘密にしても漏れるもので、いち早く敵の動きを耳にした将門は呆れながら直ちに軍勢を整え承平五年（九三五）十月二十一日、川曲（かわわ）に出陣した。水流が変わっているから正確には特定出来ないが現在の下妻市西南方鬼怒川右岸辺りと思われる。原文に「案の如くに討ち合い」とあるので今回の合戦は双方が合意の上で始めたものである。赤城宗徳氏の説に依れば戦場は将門の領地に接する地域であつたらしい。

合戦を仕掛けたのは叔父の良正であつたけれども将門は敵を選ばないから親族が相手でも真面目に戦い今回の戦闘でも将門軍が勝ってしまった。負けた良正軍の兵士六十余人が討ち取られ、逃亡

者は「数え切れない」と記されている。気の毒だけれども全滅状態なのである。

其の日の（其の合戦の）火勢は雷のように鳴り響き煙は雲と競って空を覆い、近くの山王神社も焼かれて神様が岩に隠れた。多くの人家は灰になり風に飛んだ。此の状態を見た下総国府の役人も一般市民と一緒に呆然としている他はなかった。家を焼かれた人々の親類縁者も駆け付けては来たが嘆くことしか出来ない。合戦で討たれた者や流れ矢で命を落とした者は数知れず、戦場から逃れた兵士の家族たちは凶らずも一家離散の悲運に見舞われた―平良正は余計な事をしたものである。当然ながら勝った将門の軍勢は翌十月二十二日に意気揚々と自分の館へ引き揚げて来た。

○良兼の介入

喧嘩でも戦争でも当事者同士で俟（つま）しく戦っているうちは目立たないが、規模が拡大してくれば噂は広がってくる。勝負の世界では結果が全てであるから勝てば良いが、負けると敵の評判を上げるだけになってしまう。将門に合戦を仕掛けて見事に負けた平良正も其の様な立場に置かれたのであるから静かにしていれば良いのだが合戦前に大風呂敷を広げた手前、其の俣では引つ込みがなくなってしまう。苦し紛れに考え出したのは、日頃から将門と仲が良くない自分の兄の上総介義兼を巻き込むことである。

義兼は筑波山西麓にも領地は在ったが、職務の関係で上総国に居た。卑怯な良正は自分に都合の悪い事は書かず、最初から将門は横暴なる振る舞いをした者として自分の被害だけを並べ立てた。

特に手紙の文句で決め手となる部分は情緒たつぷりに「…雷（稲妻）が轟然と響くのは風雨の助けが有るからです。また白鳥・鶴などが雲を越えて飛翔出来るのは羽根・翼のお蔭です。その様な次第ですからどうか兄上のお力添えを頂き、乱暴な将門を懲らしめたいと願っております。其れに依つて常陸国内が鎮まれば、人々の心配も無くなり、此の国も元の平和を取り戻すことができます…」と正義感溢れる人物の様な名文句を書いた。

「私闘の始まり」の項でも触れたが其れで無くても義兼は甥の将門と不仲であったから良正の手紙を全く疑わずに信用したのである。当然のことながら事実を確かめることはせずに言い切った。

「昔の悪い王は、自分の都合で父親を殺す罪まで犯したと言う。したがって今の時代に甥（将門）の不正を糾弾するのに何の躊躇が要るものか！良正の言うところは当然である。なぜならば前常陸大掾・源護殿も同じように将門の乱暴を嘆いておられた。此の良兼は、護殿の姻戚に連なる身であるから速やかに将門討伐に出陣しなければならぬであろう。良正も、そのつもりで、速やかに軍備を整え待っているが良い！」

兄・義兼の力強い言葉に励まされた良正は譬えれば龍が水を得たように喜んだ。それは中国の前漢時代に將軍・李陵が敵を前にして振るい立ったように良正に勇気を与えた。親分が元気を回復したので、家来たちも前の敗戦のことは忘れ（忘れたくは無かったが）傷を癒し、壊れた楯を繕ってから集まって来たのである。

下野国境の戦い

「喧嘩両成敗」と言う。当事者で無い者は敵対する両者の言い分を公平に聞いて是を依怙鼻負無く裁くのが務めだと思うが、上総国の高級官僚であった平良兼は弟と甥の対立に、頭から「悪いのは甥」と決めてかかった。それどころか、自分も弟に加勢するための軍兵を集め、大軍を率いて承平六年（九三六）六月二十六日に常陸国を目指して上総・下総を出立したのである。

良兼は地方の高級官僚と言ってもナンバーワンでは無かったから、国府の役人たちが「異常な行動」を咎めて出発を阻止しようとしたのだが、良兼は適当に「親類の家を訪ねる」などと返事をして強引に出て来たらしい。原文には「役人の制止を振り切るようにして駆け抜けて来た」とある。公務員に有るまじき振る舞いである。

其の様な事情があるから、街道を堂々と進んで来る訳にも行かず、上総国武射郡の裏道を抜けて下総国に入り、それでも香取神宮に参詣してから利根川を渡って現在の江戸崎辺りに到着した。

其処で軍勢を休息させてから翌日早朝に出立して阿見、荒川沖、土浦辺りを経由、水守（みもり）に在った平良正の館に着いたのである。現在の筑波北部工業団地近辺と思われる。

この部分の原本は「斯の鶏鳴に良正参向して不審を述べ…」とあるから救援を頼んで置きながら早朝に到着した兄の義兼を良正は出迎えなかったことになる。機嫌が悪い義兼は、見当違いに貞盛を呼び付けて苦情を言った。

「聞けば、お前は将門と戦おうともせず居るようだが、是は武人として恥ずべきことでは無いか？…武士は何よりも名を惜しむべきである。

父親を殺害され、領地も取られ、多くの一族家

臣を討たれた敵である将門を野放しにして、然も其の仇に媚びようとしている態度は許されぬ。此の度、私は良正に乞われて将門と戦うことにしたから、貞盛も私に協力するように！」

其の様な趣旨で義兼は貞盛に長々と説教を始めたのである。相手が叔父なので反論も出来ない貞盛は、下手な説教を長々と聞いているよりは楽だと観念して、本心からでは無いが叔父たちに味方して将門と戦うことに同意したのである。そこで義兼、良正、貞盛の三人は大軍を従えて将門を西北方面から攻撃すべく、下野国へ移動した。

将門のほうでは、叔父側に其の様な重大な動きが有ったことは知る由も無かったが、将門に心を寄せる者から緊急の知らせが届いた。その事実を確かめる為に将門は承平六年十月二十六日に僅か百騎で下野国との境に向いて行った。

現地へ行つて見ると、知らされた通りに敵方は数千の軍勢を揃えていた。然も合戦を経験して居ない軍勢であるから兵士も軍馬も疲弊して居らず武器も十分に装備していた。其れに比べて将門の兵は何度も戦った後であり、休息も補充もしていないから矢数は少なく人馬共に疲れている。

義兼の軍勢は将門一行に気付き、其のお粗末さに同情しながら楯を並べ、猛烈な勢いで押し寄せてきた。其れを見た将門は、敵が攻め掛かる前に此方から徒歩の兵に肉薄攻撃をさせた。此の先制攻撃は効を奏して義兼軍の人馬八十余が倒れた。是を見た総大将の義兼は予想以外の結果に驚き、思わず逃げ腰になったので従っていた敵の軍勢も大将に合わせて退却を始めたのである。将門は逃げる義兼を追って、馬に鞭打ち果敢に追撃したため数千の軍勢は何の役にも立たず、近くに在った

下野国府の庁舎内に逃げ込んでしまった。下野国府は、現在の国分寺町と栃木市の間道に置かれていたようである。

将門、伯父を見逃す

思いがけず碌な戦闘もしていないのに勝つてしまった将門は愕然としながらも考えた。自分を攻めようとして遙々と千葉の方から出しゃばつて来た平義兼は、憎んでも余りある敵ではあるが肉親の伯父（父の兄）である。世間の諺で「夫婦の仲は隙間の無い瓦葺き（屋根）のようで、親戚関係は荒い茅葺（屋根）のようだ」と言うけれども、伯父を殺害したとなれば、非難を受けることが目に見えている。此の場合は（敵の総大将ではあるけれども）義兼だけは見逃がすことにしよう…。

そこで敵が逃げ込んだ下野国府の西側部分の包囲を解き、伯父・良兼が逃亡する環境を整えた。将門は伯父だけを逃がす予定で作戦を立てたのだが総大将が脱出するのは是を黙って見送る兵は居ないから、一千余人の軍勢も良兼と共に逃亡してしまつた。此の状況は鷹に狙われた雉が命拾いをしたようなものであり、義兼の軍勢は鳥籠から放された鳥のように思いがけない解放の喜びを味わつたのである。（将門に包囲攻撃されたら全滅？）

其の日、将門は「此の度の合戦は伯父の上総介義兼が道理に反して仕掛けて来たものであること」を近隣の諸国に触れ回り、国府の日誌に記録してから、其の翌日に下総国の本拠に引きあげて行った。是から暫くの間は特に事件は起こらなかつたのであるが伯父甥の中で合戦をして然も負けてしまつた良兼側と、最初に将門に合戦を仕掛けた源

護側にしてみれば、悔しきだけが残る結果になつてしまつたから、その俣では済まされぬ。

俗に「喧嘩両成敗」などと言うが、是を裁定する者が余程、公平無私な人物で無いと中々、正しい見方、適切な判断はして貰えない。此の場合も先ず、平将門にしてみれば「仕掛けられた戦い」であり、受け身で戦つたのであるから疚（やま）しいところは無いので、その辺りのことを現代の選挙候補者の様にして近辺の人々に知らせる回りに更に克明な記録を下野国府の庁舎に書き残した。

喧嘩を仕掛けて来た伯父を追い詰めた見逃し、さらに事件の顛末を書き残してきたのであるから客観的に見ても、平将門の行動は堂々としてゐる。其の所為もあつて、其れから暫くは何事も無くて済んだのである。下野国府からは将門が提出した書状と国府役人が作成した報告書が京都に送られ、其れによつて事件に対する是非の判断が下されることになる。其の俣ならば将門の行動は正当化されて、伯父・義兼や良正、さらに背後にいる前常陸大掾・源護らの罪が問われる。

世間知らずの将門は「是で一件落着」と下総国へ戻つてきたのだが、負けた方の連中は世間慣れをしてゐるから其の俣では引き下がらない。下野国府が動く前に、源護は自分たちの都合が良い筋書きで「告訴状」を作り、京都に送つていた。

後代に楠木正成が標榜した様に「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権（力）に勝たず…」で、次の展開は源護が一早く京都に送つた「平将門を告訴する」書状に依つて、将門が事件の犯人として苦況に立たされることになる。 続く

「ふるさと風の会 文庫展」「ことば絵同好会展」

11月10日(日)～13日(水) 石岡市・まちかど情報センター

(最終日は15時まで)

- ・菊晴れは何処に 雀らチュンと鳴く
- ・まんまるの満月は十六夜 月明りに星々は目暗む

ふるさと風の分科会「風のことば絵同好会」:

「ことば絵」とは、風の景(かけ)を色彩とことば詩(うた)によって表現する石岡に生まれた表現です。会員のこの一年間の遊創をご覧いただき、ご感想など頂けましたらと思います。

なお、風の会文庫も展示販売しております。

皆様のお越しをお待ちいたしております。

ふるさと風の会・ことば絵同好会 (担当: 兼平智恵子)

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集(全6巻)、歴史の嘘、私本平家物語、私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遥かなる旅路(1、2)
- ・木村 進…地域に埋もれた歴史シリーズ(全24巻)石岡地方のふるさと昔話、茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、霞ヶ浦の紅い鯨、朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談:勉強会を行っております。会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

木村 進 080-3381-0297 編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)